

「一員」とチームプレイ

三年生が引退して、同じ学年のサッカー部員八人のうち、七人がレギュラーになった。僕はレギュラーにはなれなかった。入部してから三年生になった今まで、公式戦に出たことは一度もない。そんな自分が情けなくて恥ずかしくて、着替えてグラウンドに出ていくのも気が重かった。「控え」とか「サブ」とか、そういう言葉が耳に入ってくるたびに、それが自分に向けられたものでなくとも、傷ついた気分になった。

ある練習試合。僕はチームメイトと交替して後半から試合に出た。試合の途中で二年生の選手がミスをして、一点取られた。別の二年生の選手から厳しい言葉が飛んだ。僕はその言葉を言った二年生のところに行つて、

「まだ時間あるから大丈夫だよ。冷静に冷静に。」

と声をかけた。そして急いでミスをした二年生のところに行つて、

「気持ちを切り替えて、次のプレーを大事にしよう。」

と肩をたたいた。僕自身も何度も同じような経験をしてきたから、

とっさにそんな行動をとったのだと思う。

結局、その試合は対二で負けた。

帰り道、試合中に声をかけた二人が、僕のところに来た。

「同じ仲間なのに、すみませんでした。」

「励ましてくれて、ありがとうございました。」

二人はそう言って、ぺこんと頭を下げた。

「いいってそんなこと。それより次の試合も頑張ろうな。」

すると、顧問の先生が、

「さすが三年生だな。」と声をかけてくれた。

（僕はサッカーが好きだ。一緒にサッカーをやっている仲間たちが好きだ。だから、明日からまた頑張ろう。）

三年生として、サッカー部員として、このチームのために恥ずかしくない自分になろうと、その時思った。



合唱コンクールは、私たちの学校がとても大切にしている行事だ。一年生も三年生も関係ない。全てのクラスに優勝の可能性があって、だから、全てのクラスがライバルだ。当然、私たち二年生にも優勝のチャンスはある。なのに……。

練習が始まって一週間。クラス代表の実行委員の私は、正直、うんざりしていた。練習に真面目に参加しない男子たち。そんな男子たちに文句を言う女子たち。では女子は真剣に取り組んでいるかという点、パート練習の時など、おしゃべりをしている時間のほうが圧倒的に長い。

これでは、去年と全く変わらない光景が繰り返されているだけではないか。

私は、アルトのパート・リーダーとして、パート練習の時にはメンバーにしっかりと練習に参加するように何度か声をかけた。しかし、

「だって男子も全然練習してないし。」

「あんなんじゃない、こっちだってやる気出ないよね。」

男子のパート・リーダーにも、真面目に練習に取り組むように声をかけた。しかし、

「真面目にやってるよ。なあ？」

「そうだよ。誤解だよ、誤解。」

そう言って大声で笑い出す。

やっぱり、去年の繰り返しだ。

『心をひとつに 響けハーモニー』

教室の壁に貼られた今年の合唱コンクールのスローガンが、とてもむなしなものに見えた。

放課後、私は誰もいない教室に、一人残っていた。今日の練習もやっぱりうまくいかなかった。いろいろなお話、もうどうでもいらいように思えた。今日の練習もやっぱりうまくいかなかった。

そこへ、部活動を終えた明彦がやってきた。「どうしたの？」と声をかけてきた明彦に、私は、自分の中にあっという間にいろいろな思いを一つずつ話した。ずいぶん長い時間、私は話し続けた。いつもはふざけてばかりの明彦だったが、その時は黙って聞いてくれていた。私が話し終えると、

「まあ、みんな同じじゃないから。それが分かっているから、『心をひとつに』なんだろうな。」
壁のスローガンを見ながら、そう言って、明彦は帰っていった。



翌日の練習の時。

パート練習を終え、全体で合わせるために私たちが教室に戻ってくると、男子が全員、合唱隊形に整列していた。あ然としながら、私たちも隊形を整える。指揮者が構え、伴奏が始まり、そして……。

男子はこれまで聞いたことのない大きな声で歌った。時々音程がずれていたりと、どこどころ歌詞をまちがえていたりしたが、誰一人ふざけたり笑ったりせず、最後まで歌いきった。(こんな力強い声が出せるなんて……) その歌声は、一年生の時とは明らかに違っていた。

「すごい。びっくりした。」
「上手だったよね。」

「かっこいい。」
女子が口々にそう言うと、男子たちは少し恥ずかしそうな顔を見せた。

「やる時はやります！」
後ろのほうから声が出た。明彦だ。このサプライズの仕掛け人も明彦に違いない。

「でも、途中、音程ずれてたけどね。」
誰かがそう言うと、教室が笑いに包まれた。

「女子もがんばろうよ。」
「負けていけないよね。」

勝ち負けの問題じゃないだろうという男子の声に耳を貸すことなく、女子がもう一度隊形を整え始めた。

「ほら、真紀も、早く。」
「ほんとうに肩をたたかせる。」

「真紀が隣で歌ってくれないと、私たちまだ音が取れないんだから。」
「今頃何言ってるのよ。全体練習終わったら特訓よ。」

わざと怖い顔をつくってそう言うから、私も自分の位置に立つ。
指揮者が構える。

きんっと教室の空気が硬くなったような気がした。

『心をひとつに 響けハーモニー』
壁のスローガンが、さっきまでとは違って見えた。



君が「一員」であることの意味を見いだすのは、君自身だ。

君が「一員」であることにプライドをもてたなら、それは、君が君であることのプライドになるはずだ。